

ママへの疑惑

兄の颯^{はやと}は常々、妹の美織^{みおり}のことを侮^{あなど}れないと思っていた。彼女はまだ高校三年生だが、とても勘がいいのだ。鋭いと言ってもいい。

勉強はそこそこで、可もなく不可もなくというところだが、颯は日ごろから美織に見透かされることが多々あったのだ。

なんというか、隠していることでも当てられるといったら解りやすいだろうか。両親は誤魔化せても美織のことは誤魔化せない、のだ。

嘘を見破られることなんて普通にあった。そんなこともあり妹の前では、いつも丸裸の状態だった。

そんな彼女の鋭さが良い方に出ることも、悪い方に出ることもある。勘がいいからといって、それがいつも美織の利益になればいいのだが、不利益になることだってあるのだ。知らなくてもいいことを知ってしまったたり、知らない方が幸せということでも知ってしまうことがある。

とにかく美織のアンテナは鋭い。彼女としても意識していなくても、それを察知してしまうのだと思う。ある意味不幸なことかもしれない。

颯も今は高校卒業して二十歳になり、会社員として働いているが、学生時代はよく妹に悪事を暴かれたものだった。

「お兄ちゃん、今日お腹が痛くて学校休んだってウソでしょ」

「お兄ちゃん、好きな人ができたでしょ」

「お兄ちゃん、二股はダメだよ」

言ってもいないのに、なんで解るんだと思うことがしばしばあった。本当に彼女の観察力には脱帽する。

颯だけではない、父も母も見透かされているのだ。それは直接親に言わないこともあるが、言うこともある。そんな空気を読むこともできるのだ。ばらしても問題ないことは言うし、言わない方がいいことは黙っている。

きっと颯もそんなことがあるのだろと思うていた。自分に言ってこないことでも、もっと知られていることがたくさんあるのではないか、ということだ。ある意味颯は美織のことを恐れてもいた。敵に回すと怖いということだ。

そんな彼女でも、いや、そんな美織だから頼りになることもある。その鋭さを利用して相談を持ちかけることもあったりする。

好きな人ができたときに、告白してもいいかを相談するにはいちばんいい相手なのだ。その女の子の特徴を伝えて、「どうかな？」と訊くと、「それはやめた方がいいよ」とか「それ

ならいけるかも」と答えを出してくれる。

それがほぼ当たるのだ。今付き合っている彼女も美織に相談して、「いった方がいい」と言われて告った相手だった。会社内の別の課の女の子で、以前から可愛いと思っていたのだが、なかなかデートに誘えずにいた。

あるとき会社内の合同の飲み会のようなものがあって、他の課の人たちと一緒に飲んだのだが、たまたまその子と話す機会があったのだ。そのときを狙って話しかけた。

飯塚^{いいづか}真央^{まお}という二十一歳の女子社員だった。颯よりも一つ年上だが真央も颯のことを知っていてくれた。同じ会社内なので顔を会わせることもあったが、課が違うために話しかけることができずにいたのだ。他の課の子にはなんとなくいきづらい。そこまでの勇氣はなかった。

たまたま飲み会で話せる機会があり、話してみるとすごく気さくな子で、颯にも明るく話しかけてくれたのだ。さすがにその場で「付き合ってください」なんて言えなかったが、その後は会社内でも気軽に話しかけることができた。

そこで美織に相談したのだ。そうしたら「GO」サインが出たので、思い切って食事に誘ってみたのだ。そして意外にもOKの返事がもらえたというわけだ。

あとで判ったことだが、真央も颯のことが気になっていたらしい。付き合い始めてから彼女が言ってくれたのだ。それを聞いたとき彼は舞い上がり、人生で最高にテンションが上がった瞬間だった。

真央は決して、スタイルがいいという美人ではない。少し肉付きがいい感じの可愛い子だった。デブとまではいかないが、抱き心地が良さそうで颯は気になっていたのだ。笑うと本当に可愛い子なのだ。

真央と付き合って一か月ぐらいになるが、まだエッチはしていない。食事や映画に行っている程度だ。それでも好きな子と付き合っているのだから、今は幸せいっぱいだった。

背中を押してくれた美織には感謝しなかった。そんな勘のいい彼女が昨日の夜、颯の部屋に来て、ある情報を聞かせてくれたのだ。

「どうもママが不倫してるみたいなんだよね」

というのだ。彼はその話を聞いて寝耳に水だった。まさか、と思った。自分の母親が、父以外の男と付き合っているなんて想像もしなかった。

「え、マジかよ。嘘だろ」

「嘘でこんなこと言えないよ」

「ええ……？　なんでそれがわかったの？　なんか見たの？」

「恵美ちゃんのお母さんが見たんだって」

その話はこうだった。近所に住んでいる恵美という真央の友達がいたのだ。幼馴染で今でも真央とは交流があるらしいが、そのお母さんもウチの母と仲がいいのだ。二人はたまに買い物に行ったり、ランチを食べに行ったりしていて、よく一緒に出掛けている。

